

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370005

研究課題名(和文)心身の難問に向かうものとしてのアリストテレス哲学の研究

研究課題名(英文) A Study of Aristotle's Philosophy Relating to Various Phases of the Mind-Body Problem

研究代表者

渡辺 邦夫 (WATANABE, Kunio)

茨城大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：30191753

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：アリストテレスの倫理学と心の哲学が心身関係論を回避せず積極的に荷担したことを示した。かれは徳の説明において感情の状況に応じた「量」にかかわる主張を提出し、状況に応じた直観的認知としての実践的知性から行動が起こると説明したと解釈した。意志の弱さの問題をめぐってもかれは心身因果にかかわる解明を遂行した。心の哲学ではアリストテレスが、欲求を補佐して行動を生む認知の問題に取り組み、行動における人間の認知を、規範という視点から考察しつつ、心身一元論を守ったと解釈した。またかれはスキルや知識や道徳性の学習成果が付帯的知覚としても知性認識としても現れると考えており、知性主義的で一元論的であったと解釈した。

研究成果の概要(英文)：Aristotle is committed to the mind-body relationships both in his ethics and in his philosophy of mind. First, his explanation of the virtues of character employs the term 'intermediate' of feelings which should be taken in a quantitative manner, and in such a way as to reveal one's intellectual response to individual situations. Secondly, in his solution to the problem of incontinence, he acknowledges the existence of the mind-body relationship concerning objects of desire. Third, when he explains how animals are moved, his choice of the word 'intellect' for all the recognitions that contribute to animal movements mirrors his wish to focus on the normativity of such recognitions. However, this choice is consistent with his mild monism concerning mind and body. Finally, Aristotle sees 'accidental perceptions' from his wide perspective, which allows him to talk about skills, science and virtues as elements that have led one to an excellent accidental perception of the here and now.

研究分野：古代ギリシア哲学

キーワード：心身問題 アリストテレス 『ニコマコス倫理学』 実践的知性 『魂について』 欲求 付帯的知覚
学習

1. 研究開始当初の背景

アリストテレスの心の哲学については、アクリル、B.ウィリアムズ、バーニエトなどの有力研究者によって、アリストテレスの魂理解と知覚の説明にかんする根本的疑念が提出されており、その疑念はかれの質料理解を焦点にするものである。現時点で魂理解においても知覚の説明においても質料概念の有効な機能を積極的に申し立てる解釈は提出されていない。本研究は、アリストテレスが心身関係を「回避」というより、むしろ議論の要所でそうした関係に荷担し、その荷担を通じて、説明されるべき生命現象一般についても知覚についても、「質料を説明要因の一翼とする説明」の提出による心身理解を示した点、この理解は現代的意義をもつものであること、この二点を論じ、従来解釈の難点を克服することを目指した。

アリストテレスの倫理学説、とくに人柄の徳の説明に関して、徳とは「中間」として『ニコマコス倫理学』第2巻第6章の人柄の徳の定義的説明について、「適度」程度に解釈する「質的解釈」と、特定量の感情が問題だとする「量的解釈」が対立しあっていて、簡単に解決しない。ここでも、量的解釈を洗練することを通じて、積極的に心身関係論の場面で態度を取ることでよりアリストテレスが、有徳な行為とそうではない行為を客観的に分けることができた、ということを示す。

2. 研究の目的

アリストテレス哲学における、倫理学と心の哲学の二分野において、心身の関係が諸問題の収斂する「場」であり、この問題場面に身を置いたかれの考察が、合理的認識を生むような特殊な性質をもっているということを示すことが、本研究の目的である。当該二分野それぞれについて、以下の目的を設定した。

- (1) 倫理学において、幸福の鍵とされる「徳（アレテー）」の議論は、感情・欲望などのいわゆる「非理性的」機能の規範化と理性化をもくろんでおり、この意味で心身問題の一定の解決への荷担があると示す。そして、この荷担は全面的であるということ、また、それが物的一元論と親和的であるかぎり積極的な現代的意義もあるということを示す。
- (2) 心の哲学において、生きた眼は眼だが、死んだ眼は眼でなく同音異義的にのみ「眼」である。「身体」と、一般に質料は、心身結合体から切り離されて自存する実体ではない。以上のアリストテレスの論点は、ボトムアップの現代科学による説明法と整合する、と示す。

3. 研究の方法

本課題の研究期間4年を前後2期に分け、前半2年では、倫理学におけるかれの心身関係への独自の積極的荷担と、その成果としての思慮深さ論（『ニコマコス倫理学』第6巻第12章など）と無抑制論（同書第7巻第1～10章）における見解を解明する。後半2年では、『魂について』などの心の理論哲学におけるアリストテレス心身関係論を解明する。その際、実践哲学・倫理学の健全な成果を踏まえつつ、アリストテレスの諸主張が生命階層説の内部の特定階層に着目するという特徴があったということをも最大限活用する。

4. 研究成果

(1) 研究の方法の順番に従って、まず雑誌論文 および図書 の「解説」448-473頁と図書 の「解説」447-458頁（「解説」はすべて、渡辺単著）のなかで、『ニコマコス倫理学』第2巻第6章の人柄の徳の定義においてアリストテレスが「すぐれた人はすぐれた行為の継続により、超過でも不足でもない『自分の怒りの量』や『自分の欲望の量』などをもつことができる」（図書 456頁）と考えていたと解釈した。この解釈により、関連する感情の量が、心身因果のルートで身体的基盤をもつような確定性をもつ、ということが確保される。

しかし、人柄の徳と、それらにかかわる思考の徳である「思慮深さ」は、毎回微妙に異なる個別状況の個別性への感受性を発揮しながら、まさにその特定状況において適切な感情量により、当の状況への「応答」を出さなければならない。個別性へのこのように繊細で「知的」な対応をアリストテレスは、実践的知性（ヌース）と「知覚」の近さ、つまり知性の直観的認知としての力の認定によって説明した、と思われる。図書 464頁では、「実践的な認識であれば、知性である知覚によって、その人の適切な感情状態を映した『・・・として見る』ことが、行為を決定する過程のはじめに成り立っていた」とかれが考えており、「過去の行動の成果により、思案してゆくうちに『状況が見える』」ことも捉えていた、と解釈した。

以上の人柄の徳と思慮深さ（および、実践的知性）にかかわる解釈は、『魂について』などの理論学の著作の解釈と関連する。とくに、「・・・として見る」こと（「アスペクト知覚」）の問題に深くかかわる論点が解釈の中心に来ている。この点については、下の(4)の部分の研究で、「付帯的知覚」とアリストテレスが呼ぶ種類の知覚にかんする解釈により、補完している。

(2) 次に取り組んだ倫理学の問題は「意志の弱さ」であり、ここでのアリストテレスの心身関係への積極的荷担を肯定的に評価す

ることが目標であった。

図書「解説」474-484頁において、アリストテレスによるこの主題の議論を理解する鍵が、かれ独特の心身関係論を公正に評価することにあると論じた。

まず、アリストテレスが意志の弱さの問題の解決を一気に述べる『ニコマコス倫理学』第7巻第3章解釈において、チャールズとローレンツが新たに付け加えた解釈上の新発見を活用する必要があった。

その発見とは、この章の議論においてアリストテレスが、ひとつの命題単独の内容を「知っているか、それとも知らないか？」という問いにあたる問題意識を、「知る」と訳せるギリシア語「エピスタスタイ」と「知識」を意味する「エピステーメー」に關係して、そもそももっていなかったということ、かれの「知る」(「エピスタスタイ」)は必ず、一命題を他の命題との組で体系的・組織的に「理解」することであったということ、この2点である。

私はかれらの「体系的理解」の論点を踏襲しつつ、アリストテレス実践哲学におけるその「理解」そのものについては、かれらが申し立てる「複数命題の組の体系的理解」というより、命題(ないしその命題にかかわる信念)が個人の心と行動の文脈でもつタイプの「体系性」をもつ理解であると解釈した。そして、命題の表現としては「これは甘い」と言い表せるタイプの「一つの命題」であっても、心身因果が直接的関連性をもつ文脈で、「甘いものを食べるべきではない」という大前提と結びついて、結局食べないか、「甘いものならとにかく食べたい」という、欲望の表現である別の前提と結びついて、結局食べる行為を生むか(いわゆる「意志の弱い行為」の成立)の違いを、アリストテレスは問題にしていたと解釈した。

なお、以上の解釈は文庫翻訳解説記事という制約をもっている。今後、専攻論文の形においても再論し、より詳細な内容を補完する予定である。その際、実践的知性や思慮深さが、実践哲学特有の「知性的機能」であることが私の解釈のポイントなので、上記(1)における思考の徳の研究とこの意志の弱さの議論の解釈を、より明示的に結びつける。

意志の弱さの議論の解釈に付随して、倫理学講義が聴講者の若者に「考えさせる」という意義をもつものであったことを示し、そこでアリストテレスは、若者が自身考える必要がある諸問題を示してみせているということ強調した。この「示し」には、心身の好ましくない関係が「樹立していること」ないし「近い将来樹立する恐れがあること」にかんし、若者たちに警戒と予防を呼びかけるといった教育的配慮が含まれていた。上述の「意志の弱さ」という現象の解明は、最終的に、一見「知性的な」命題もしくは「知性的信念」にみえるものでも、欲望という真の主演となる心の非理性的要因の「言い訳」になること

があるというアリストテレスの分析を生む。ここから、意志の弱さに悩む者への単刀直入な助言が生まれる。

図書484頁で、意志の弱い行為、ないし抑制のなさは、道徳的非難に値し、個人にとっても組織にとっても打撃を与えようよくないものであるが、「だからと言って自分をひたすら責めても、道徳的反省に徹しても、まるで金縛りにあったように、それで抑制のなさから抜け出すことはかえって困難になる」とまず指摘し、しかるのち、酔った人が酔ったまま「反省」しても十分でなく、酔いからさめなければならないように、「抑制のない人も、自分の状態を各種の依存やほかの心身両面が關係する不調と同等のこととみなして、自分を実際にまず正常状態に戻すことが真に効力があることだと、アリストテレスはわれわれ読者に助言している」と結んだ。

心身關係はわれわれ自身の内部の問題でありつつ、心身間の諸問題の解決はわれわれの「気づき」の有無に左右される。そのため、とくに人生経験がまだ十分ではない倫理学聴講者や倫理学書読者にとって、そこへと注意をもっていくことで、有益な助言となる。「啓蒙」の要素がある、ということである。このような理論と実践の結びつきが、アリストテレス倫理学の現代的意義の一つであると考える。

(3)後半2年の研究では『魂について』を代表とする心の理論哲学における心身關係論を研究し、成果をあげた。

まずその第一弾として、雑誌論文において欲求機能にかんするアリストテレスの心身關係解釈を説明した。おもな解釈対象のテキストは『魂について』第3巻第10・11章である。この2つの章でアリストテレスは、その直前の第9章において自身が提出した「動物の行動の原因をめぐる難問」を解決しようとしている。私は、本課題の一般的路線のもとで、かれが心身關係論的に無理のない欲求論の主張を出すことができたと解釈し、その主張を心身一元論の枠組みのなかのものとして説明した。

解釈者たちを悩ませている第3巻第9章と同巻第10・11章の間の「齟齬」の問題が存在する。第9章では欲求と「表象(ファンタシア)」の組が動物の行動の原因であると論じていたのに対し、第10章冒頭では、表象を「知性(ヌース)」ないし「知性認識(ノエーシス)」と捉えなおし、欲求と知性の組が原因だとまず論じ、しかるのち、この新路線に則って詳しい理論的説明を与えていることが問題である。第9章以後アリストテレスは心変わりしたのか？

欲求と組になって動物の行動の原因をなす「認知的なもの」が問題だが、私は当の認知的要素を「表象」から「知性」へと第10章冒頭でアリストテレスが言い換えることの理由は、「知性」の中心的な意味のほかに、

類的な意味の「知性」をかれが想定する必要を感じ、従来「表象」の名で呼んできたこの広義の類的な認知機能をも「知性」と呼ぶことにしたから、というものだと解釈した。この解釈で活用するアリストテレスの表象（ファンタシア）理解は、それが、あらわれ（ファイノメナ）と同様、多くの誤りの源泉であるというものである。すなわちアリストテレスは、「行動のための認知」にかかわる第9章までの次の見取り図 から、第10章以後の広狭二義の「知性」の見取り図 へと、移行したのだと思われる。

知性 = 人間の誤りえない認知
それ以外 = 表象（劣った人間も未熟な人間も他の動物ももつ、誤りを多く含む認知）
狭義の知性 = 上記 の知性
広義の類知性 = 上記 の知性 + 表象

なぜ見取り図 が新たに必要になったかと言えば、第一に、人間と他の動物の行動一般について、欲求と組をなす認知機能に一つの類名を与えることは、議論自体が要求していることであった。第二に、その類名が、「知性」という、文字通りに狭義には人間の誤らない認知の名の「転用」であった事情は、善いものをずばり認知し、真を教える知性認識を「核心的な意味」とした上で、行動の原因となる認知の広がりを「規範」に基づいた記述の仕方では表現したいとかれが考えた、ということだと思われる。

このとき、アリストテレスは明らかに、すべてのあらわれと表象を平等とみなす、ソフィストのプロタゴラスの相対主義の立場を意識し、「規範」と「規準」を語りうる別の立場でこれに対抗しようとしている。「善にあらわれるもの」が単に互いに干渉不可能なものとして並ぶのではなく、あらわれの間の葛藤を承認し、劣ったあらわれからすぐれたあらわれへ、さらには最終的には誤りのない狭義の知性による「善きもの」の把握へ、という学習の可能性を、事柄通りに押さえようとしたわけである。これらを総称して「知性」と呼んだことは、あらわれに対する善の優位と核心性を強調するためであった。

同時に、第10章の解釈論争もここまでの解釈の延長上で解決できる。論争は、「欲求に基礎を置くモデル」（行動において動物の身体を動かすものは欲求（の能力）だとする解釈）と「善に基礎を置くモデル」（動かすものは「欲求されうるもの」であり、「善いもの」もしくは「善にあらわれるもの」だとする解釈）の間で起こっていて、テキスト・クリティク上の困難を含むため、容易に解決しそうにない。私は、リチャードソンとポランスキーを参考に、善に基礎を置くモデルが優位であって、

第一に動かすもの：欲求されうるもの

第二に動かす動物機能であるもの：欲求
第二の機能の補佐：類的「知性」
動くもの：動物身体

という順位をアリストテレスは主張していたと解釈する。この解釈において、行動のための認知は、狭義の不可謬の知性ないし（他の動物の場合の）「知覚にかかわる表象」ないし（人間の場合の）「思案・推論にかかわる表象」であるが、これらは類的な「知性」に属する。この「知性」は欲求能力の働きに貢献し、行動を生むかぎり機能するから、上の表では「第三位」の補佐的な位置に来ることになる。したがって、条件ぬきには善に基礎を置くモデルが正解であり、動物内部という条件付きでは欲求に基礎を置くモデルも間違いではないという仕方で、従来の論争は完全に解決される。

解釈の大論争を、こうして端的に簡明な表現により解決できるということから、心身関係論におけるアリストテレスの原理的洞察もまた、明らかになっている。すなわち、動物はみな、何かを認めて、行動する。アリストテレスは第3巻第10章においてこの「何かを認める」部分を、人間における不可謬の知性を核心的意味とする、「類的『知性』の問題」として表現することにより、行動にかかわる認知が、規範性の支配する領域であり、人間における認知の絶対的優劣の問題を含む領域であることを、認知の記述そのものに組み入れた。

しかしこのことは、規範が「身体ぬきの知性」や「神」やほかの霊的実体に発するものであることを必ずしも含意しない。

むしろアリストテレスは、行動に至る認知における規範性の存在を、心身一元論内部で説明しようとしている。第10章の類的「知性」の導入は、第9章までの表象を無謬の知性へと「格上げ」するものではもちろんなく、人間の世界における学習と進歩、社会的・公共的規準となる価値判断の存在を、自然的事実と整合させるというだけの目的で行われた操作である。われわれ人間も相変わらず、何かを認めて、行動しており、そしてそれは、ただそれだけのことなのである。

この点は倫理学におけるアリストテレスの善と快の規準の議論とも整合的である。ことに『ニコマコス倫理学』第10巻第5章1176a10-19において「善き人であるかぎりの善き人」が快楽の規準であるとするのが、この点にもっとも密接に関連する。あれこれの特定の人でなく、社会の中でなんらか模範となって世代交代を続ける「無名氏」たちを想定し、その匿名で生身の人々が、価値の規準となる、絶対的に「善きもの」を明るみに出してくれるという一般的事実に言及しているのであり、ここでもかれは、心身一元論から逸脱しないで事実と規範を区別するという方針で一貫している。

(4)後半の最終成果として私は、計画作成時、単一の研究で生命階層説の中の触覚・知覚一般・知性の議論におけるアリストテレスの心身関係への負担を説明するというものを考えた。計画遂行段階で、そうした研究の前にアリストテレスにおける「付帯的知覚」の豊かさと柔軟さを論じなければならぬことが判明した。現在発表原稿執筆中の学会発表（平成30年度末に、その内容は雑誌論文となる）がこれに当たる成果である。したがって本記事(4)において付帯的知覚論の内容を書き、(5)では、それに続く理論的認知論の現在の構想を短く書く。

学会発表では『ニコマコス倫理学』第6巻第8章の次の章句にあらわれる「知覚」の解釈を問題にしている。「このことゆえに、思慮深さは知性と好対照とされるのである。・・・思慮深さは最終的なものにかかわるのだが、この最終的なものは学問的知識の対象ではなく、知覚の対象だからである。しかし知覚といっても、知覚に固有の対象を知覚するというのではなく、数学において最終的なものが三角形であることを知覚するような知覚である。なぜなら、その方向に進んでも、そこで探究は停止するからである。しかし、これは思慮深さというより、むしろ知覚なのである。ただしそれは、〔固有の対象を知覚する場合とは〕別の種類の知覚である」(1142a23-30)。多数派解釈は「最終的なものが三角形であることを知覚する」知覚、および「別の種類の知覚」を、知覚プラスアルファの能力と解釈する。

しかし、テキストの文字通りの言葉を受容すべきであり、これを「付帯的知覚」と解釈して、数学ないし幾何学の学習が進んだ人間であればもつが、無学な人間ならもたない「知覚」と解釈するのが適切である。この方向への示唆となるC.D.C.リープの引く『形而上学』第14巻第10章の、数学研究と学習における知覚が、普遍を或る仕方で捉えるという論点は、知覚そのものが学習成果を反映しうることのアリストテレス自身による承認であると解することができる。

この点を、『魂について』第3巻第4章429b14-18の難解な箇所にかんするもっとも説得的な解釈と結びつけるなら、数学や他の学問の能力を反映して目の前の図形や植物を「見る」場合に、「付帯的知覚」であるとも言え、またそれと同時に知性認識であるとも言えるとする見解にアリストテレスが荷担していた、と考えることができる。

このような、アリストテレスにおける「知覚」と「知性」の「両語法併存」は、最終的に、「感覚と感覚されるもの」第1章の聴覚と言語のユニークな結びつきに関する短い考察によって裏書される。その考察によれば、「ただし聴覚は付帯的には、『知性に向けての最大の部分』といいうる貢献をする。なぜなら、言明(ロゴス)が聞き取られるものでありつつ、学習の原因だからである。ただし、

聞こえるものであるということは、言明それ自体に基づくことではなくて、ただ付帯的なことにすぎない」(437a11-14)。ここでは、聴覚が知性能力を反映しやすい感覚様相であることが、聴覚側の視線からも「付帯的」なことであり、知性や学問の側からみても「付帯的」であるという対称性が明記されている。この対称性こそ、最終的に、或る知覚(見ることであれ聞くことであれ、他の感覚であれ)が学習の成果としての付帯的知覚となりうること、そして、それは別の角度から論ずるなら知性的認識そのものであることを根拠づける論であると思われる。

以上の付帯的知覚のユニークな位置は、スキルや学問知識の学習と、道徳性の修得のいずれにおいても、心身の関係が基礎にある知覚能力において、知性の学びの成果がいわばパッケージ化されて行動と学問活動に役立つ、ということを示している。したがって、以上の論点は、理論の場面でもアリストテレスが心身関係に積極的に荷担しつつ一元論者であったということの一証拠である。

(5)触覚論を切り口として、生命階層説におけるアリストテレスの心の理論哲学の解明を、上記(4)に続く成果として近日中に発表する。構想を述べると、知覚の説明において直近のより低い能力である栄養摂取・生殖能力との差異が明るみに出て動物の知覚能力が明らかになればよい、とアリストテレスは考えたと思われる。この限定された説明戦略の下で、「生きた眼」しか眼でないことを積極的に認め、その「生」の厳密な内容を、単なる栄養や生殖の潜在的な力から区別することができる、それでよい。私見では、アリストテレスはこの説明プロジェクトに成功しており、その成功の鍵は、生体が環境から水分や栄養などをまるごと受容することとの厳密な対比における、「質料ぬきの形相の受容」という知覚一般の説明(『魂について』第2巻第12章)にある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

渡辺邦夫「付帯的知覚と「知」」『ギリシャ哲学セミナー論集』16号(2019年)掲載確定、査読無、依頼原稿。

渡辺邦夫「『魂について』における欲求と「知性」:身体を動かす心の働きの合理的説明」茨城大学人文社会科学部紀要『人文コミュニケーション学論集』1号(2017年)、133-160頁

渡辺邦夫「実践知と身体:『ニコマコス倫理学』第六巻のフロネーシス論について」茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学論集』19号(2015年)196-222頁

渡辺邦夫「真理の議論の重層化の必要性について」『哲学雑誌』129 巻 801 号(2014 年) 49-67 頁

渡辺邦夫「『ニコマコス倫理学』における正義と「知」の関係について」茨城大学人文学部紀要『人文コミュニケーション学科論集』17 号(2014 年) 190-216 頁

〔学会発表〕(計 1 件)

渡辺邦夫「付帯的知覚と「知」、ギリシヤ哲学セミナー第 22 回共同研究セミナー(『アリストテレスの魂論』2018 年 9 月 8・9 日、国土館大学) 9 月 8 日発表確定。

〔図書〕(計 2 件)

渡辺邦夫・立花幸司(訳・解説)『ニコマコス倫理学(下)』光文社古典新訳文庫、2016 年、総 556 頁。

渡辺邦夫・立花幸司(訳・解説)『ニコマコス倫理学(上)』光文社古典新訳文庫、2015 年、総 513 頁。

〔その他〕

ホームページ等

<https://info.ibaraki.ac.jp/Profiles/3/000263/profiles.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 邦夫 (WATANABE KUNIO)
茨城大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：30191753